

綱吉政権と喬知

宝永元年（一七四四）一二月、秋元喬知は転封を申し渡された（『徳川実紀』）。国中の過般は甲府徳川家の領地となっていたが、徳川綱豊が宝永元年に綱吉の養子として江戸城へ迎えられたため、空いた国中へ、綱吉政権を支えて来た柳沢吉保が配置されることになった。このとき、吉保は甲府徳川家と異なり、翌二年には国中の三郡を一円に与えられることになった。国主待遇である。実質、国主とするためには、のち都留郡が幕府領ながら柳沢氏の預かり地支配になったことから見れば、都留郡を空ける必要があったと思われる。そのための秋元家転封であった。喬知の転封先は吉保が在城していた武蔵川越で、交換転封の形がとられた。この点からみれば、喬知にとっても、この転封は大きな意味を持っていた。



秋元喬知画像（秋元和朝家蔵）

喬知は戸田忠昌を父に、秋元富朝の娘を母に生まれ、富朝の養子となった。延宝五年（一六八七）には奏者番に任じられた。奏者番は將軍に拝謁する大名や幕臣の官位・姓名・献上品を披露し、將軍からの下賜品を伝達する役目で、いわば出世の振り出しの職である。ここで將軍の覚えが目出度ければ要職へと駆け登って行く。喬知は老中であった実父戸田忠昌の後ろ盾もあったろうが、『秋元家譜原委私鈔集』に五代將軍綱吉御前で論語ほかを講釈した記事が散見され、好学の気風のなか、綱吉の眼鏡に叶う譜代大名でもあったろう。綱吉の初政として重要な越後松平家改易の城受取を命じられていることも興味深い。また普請事業も無難

にこなし、寺社奉行、若年寄を経て、元禄一二年（一六九六）、実父忠昌の死去で老中に就任した。そして、川越への転封である。このときの転封が柳沢吉保への厚遇であったとすれば、喬知にとっても厚遇であった。川越は江戸城を守護する重要な城郭の一つで、江戸初期から幕政に参画する譜代大名のシンボルのな城であった。

宝永二年（一七四五）二月、秋元家は谷村を引き払い川越へと移って行った。この転封をもって、都留郡は二度と私領となることはなかった。